

## 理事長就任に当たってのご挨拶

# 人間の知恵の総合交流の場として

杉本 時哉（協同総合研究所理事長）

協同総合研究所第5回総会で凶らずも理事長に選ばれ、これから2年の任期に就くことになりました。創立以前から尽力されずっと理事長をされて来られた黒川先生がなお壯者を凌ぐお元気でもあり、また研究所である以上学者・研究者の中から理事長を推すのが自然、しかも適任の方がわが総研にはいらっしゃるではないか、と強く固辞してきたのですが、私がお推薦する方々からそれぞれのご事情を聞かされ、逆にショートトリップでよいからと説得されて、多くの会員の皆さんには意外な人事結果となった次第です。

私個人は「長」とつく役職は小さな労組の委員長とサークルの幹事長以外に経験もなく、どちらかと言うと補佐役として企画し、多くの仲間とともに実行し、結果を検証するそういう仕事に私なりの役割を自認して来ましたので、正直なところ戸惑いを感じています。

しかし、選ばれた以上は非力な理事長であることを正直に申し上げて、会員の皆さんの参加型民主主義運営に依拠し、そのお力に支えられて21世紀へ向けての研究所の飛躍の土台づくり、労働者協同組合法制化という当面する課題に微力を尽くそうと決意した次第です。

それにしても、私自身当研究所の会員の皆さんのことも十分に理解しているとは思えません。まずは皆さんの希望とか要求、実践現場の状態を良く理解することと、私自身を知って頂くことに当面ここ半年ほどは努めるつもりです。フェイス・トゥ・フェイス、人と人との関係を重視するのが当研究所のモットーでもあります。よろしく願います。

そこでまず私自身の自己紹介をさせていただきます。

1930年6月生まれ、65歳。大阪出身。1950～56

年早大在学中民科に所属。民科本部学生幹事、生協に加入組織部員の後理事、さらに大学生協連専従に。1958年同専務理事、56～59年日本生協連理事兼任。1959年全国労働金庫協会に移籍、企画、業務、統合など担当、1973年日本労働者福祉研究協会創立時に事務局長後に理事、1974年労働金庫連合会に移籍、財形、機械化（全国オン）担当、1985～1990年連合会常務理事、同年労金協会相談役、現在に至る。

以上のとおり、若年から中央組織の経歴のみで、ある意味では現場の苦勞知らず、調整の役目に徹して来たと自分では思っています。関心の赴くままに日本協同組合学会その他異業種交流研究会など多くの場に首を突っ込み、今は協同組織金融研究会を有志の方々と一緒にやっていますが、専門的な研究分野はなく専ら学ぶだけです。

労働者協同組合への関心は「雇われ者根性の克服」という労働者の主体意識を問う思想に共鳴し、最初の伊東で開かれた協同集会から参加してきました。レイドロウ博士の問題提起、モンドラゴンへの実験への共感も早くから持ち続けて来ました。残念ながら今も籍を置く労働金庫と労働者協同組合の運動との接点をまだ築けず、私自身の非力を痛感しています。いわば既成の協同組織経験の中で生きて来ただけに、これから労働者協同組合の実践の場から学ばなければなりません。ご叱声、ご鞭撻をお願いします。

新理事長としての抱負を個人的に申し上げるには、まだ実感もありません。新しい執行体制の皆さんとの協議もしていない段階ですから控えますが、私自身の現状認識をお伝えすることはお許し願えるかと思しますので、若干申し上げておきたいと考えます。

1990年の年賀状を知己の方々に差し上げた折、私は「世紀末激動の時代」と言う表現で、人類の歴史が新たな転換点に立った。そういう私の認識をお伝えしました。その認識はその後の事態の進展とともに深まり続けています。

2年半前に黒川先生と銀行業界の理論家（先生の教え子）の方と会食した折、私は「マクロ経済政策の中でミクロが見えなくなった社会経済運営の行き詰まり」という印象と「協同組織がマクロとミクロの結接点で果たすべき役割」についてお話したことがあります。その方も大いに同意され、私たちの協同金融研究会への協力を約束して下さいました。協同組織は現に生きている人間に関わるミクロの経済を担い、日々活動していますが、それでも組織の成果の点検・検証が数値で行われ、社会的評価も数値で計られます。しかし規模が大きくなれば協同組織でも数値の一人歩きが始まり、数値の裏、或いは奥に潜む人々の希望や願い、苦勞、息遣いを見失いがちになることがしばしばあります。とりわけお金という商品を扱っている金融機関では、しらずしらずの内に人間を見るとお金にみえるという現象、モラル・ハザードが起りがちです。バブルの形成とその崩壊はまさに典型的にその姿を示したものでした。一連の金融不祥事件を通じ、あらためて金融の意味、在り方を考えずにおれませんでした。

私は、何か始める時、いつもその動機と意味について考えることにしています。そして一緒に仕事に携わる仲間とも、動機（目的）とその仕事の意味（意義）について議論し、認識を共有出来るようにして来ました。しかし、同時に異論を切るとか斥けることは、それが余程全体の調和を乱さない限りやらないように心掛けて来ました。今日という価値感の多様化を受け入れる必要を感じて来たからです。むしろ、自分の身边に異論の持ち主がチェック役として居て下さるようにしてきたつもりです。協同組合に限らず一種の運動を進める人々の集団では意志統一は大切ですが、逆に仲間閉鎖的になりがちにもなり、一人よがりな狭い言葉遣いや判断に陥りがちにもなります。原則討

議の過程で外部の方々に経過をお話した際に「そういう理念は協同組合だけのものではないよ」と注意されてあらためてハッとすることがあります。「普通の人々」という言葉が確かベークさんの報告の中にも使われていたと記憶しますが、協同の理念は本来人間にとって普遍的な概念なのでしょう。しかしともすれば私たち自身が難しく語り過ぎているのかもしれない。

協同総研は、実に広範囲な学者・研究者・実践家を結集した研究団体でもあり、先程の「労働者協同組合法制を考える」シンポジウムでも、多角的な、時として対立しかねない意見まで活発に交わされました。テーマがテーマだけに論議の進め方を心配していたのですが、豊富な意見・宿題をいただいて、これぞ我が研究所という思いを強くしたものでした。今後も会員の皆さんの活発な論議参加を期待しながら、研究所の活動が法制化運動の理論的支援ともなり人間の立場からの提案型運動推進の役割を果たすよう努めていきたいものだと考えます。黒川前理事長ともこれまで折りに触れて、協同総研を社会科学以外の自然科学も含めたあらゆる学問・研究分野の方々が参加する文字通り人類の知恵を総結集する幅広いものにしたと話し合ってきました。人類の知恵がオウムのようなカルト集団による反社会的な使われ方をしないように、人類の危機、地球環境の危機を乗り越え、21世紀に向けて平和で真の豊かさに満ちた人類社会の未来を切り開く方向で組織されなければなりません。人間を専門分野別の狭い認識から解き放ち、総合的な認識の獲得に向かわせるには、あらゆる分野の専門者の交流・相互理解・相互研鑽を必要とします。協同総研はそうした壮大な実験の芽生えと言えるでしょう。今はまだささやかな一歩ではあっても、夢は限りなく未来に繋がりが広がっています。その確信を会員の皆さんと実感できるよう、新しい体制の下で研究所の運営をより改善していきたいと願っています。会員の皆さんのご参加、ご協力を心からお願いし、理事長就任に当たってのご挨拶とします。